

第一四号に寄せて

吉見 孝夫

第一四号をお届けします。今号は図らずも国語教育関連号となりました。この巻頭言以外、執筆者欄に私の名が載らないのは初めてです。個人雑誌を少しでも脱したいと願っておりまして、うれしく感じております。

府川源一郎氏の紹介される御自身の図書は、五年前の刊行ですので、お読みになった方も多いでしょう。紹介としては時間が経っています、その後の反響・評価を窺い知ることができません。府川氏からは早くに玉稿をいただいていたのですが、半年遅れてしまいました。申し訳ありません。

今村浩子氏のものは、第六号に載った「戦後の中学校国語教科書におけるインソップ教材」に続いて、小学校国語教科書を調べ尽くした報告です。三年前にほぼ九割は出来あがっていました。あとは東京の教科書図書館などで詰めの調査をして完成というところでした。ところがそこをコロナ禍に見舞われ今日に至ったという次第です。世界で最も忙しい日本の教員が校務の合間を縫って仕上げた労作です。

山西正子氏は、一九二七年（昭和二）に高等女学校に入学された御母堂が *Once upon a time there lived a country*

mouse and a city mouse ……と時折口ずさんでいらつしやったとの思い出話を披露してくださいました。「田舎のネズミと都会のネズミ」の冒頭ですね。英語を通してインソップ寓話が浸透していった一コマです。英語教科書の一節なのでしょうが、それが何かは今のところ不明です。

私の書いたものでは、古い文献を引用する場合も、いわゆる旧字、異体字、俗字、略字等は常用漢字表の字体（新字体）に統一することを原則としておりますが、例外的にそれに従わなかったことがあります。「辨・瓣・辯」は全て新字体では「弁」となりますが、使い分けを敢えて示すために、もとの文献の字体どおりとしました。また「處飾」という「虚飾」の誤植を、ある文献に見つけました。これを原則どおり「処飾」とすると、誤植に至った事情が見えにくいので、これも原本どおりにしました。

字体の扱いには、いろいろと気になることがあります。最近こんなものを見つけました。「朝日新聞」二〇二二年三月一九日の原武史「歴史のダイヤグラム」というコラムに、「朝日新聞」大阪本社版一九四一年一月一八日

朝刊の記事が「地下鉄などが混雑することは當然であるが、……」と引用されていました。当然原文は「地下鐵」「混雑」となっているはずですが、こちらは新字体にして、「當然」だけ旧字体にしているのです。どうも腑に落ちません。この類はしばしば見かけます。

漢字は私程度の知識では手に負えないところがあります。『徒然草』第三百三十六段に関連して、「塩」の正字が「鹽」だとは単純にはいえないという山田俊雄氏の説も思い出されます。もともとも六〇年近く経つてもこの考えは、一つの例外（小松英雄『徒然草拔書』）を除いて現今の『徒然草』解釈に反映されていないようです。

イソップ寓話をしばしば載せる昔の修身書では「脩身」という表記に出くわします。「脩」はてつきり「修」の異体字だとばかり思っていました。別の字だと知りました。部首も「修」はニンベン、「脩」はニクヅキです。先の原則に従えば、「脩」は「修」に変えられませんか。しかし、ちよつと待てよ」とも考えるのです。誰でも漢和辞典の知識を持ち合わせているわけではありません。同じ文献に「修身」「脩身」が併用されています。するとこの著者は私同様に「修」「脩」を異体字と誤解しているのではないか。ならば翻字に当たって「修」に統一してもよいのではないかと。

常用漢字表の「前書き」には「この表は……固有名詞を対象とするものではない」とあります。最近には姓名に旧字体や異体字を使う方も目に立ちます。中には姓は旧、名は新、あるいはその逆という方もいますから注意が必

要です。このように固有名詞にはちよつと面倒なことが出てきます。ここで僭越ながらクイズです。狂言界を代表する親子「野村マン作・マン斎」、私立大学「皇ガク館大ガク」「國ガク院大ガク」「志ガク館大ガク」、大手牛井チェーンの「ヨシ野家」ホールディングスの看板「ヨシ野家」、以上の傍線部分を漢字にしてください。答えは「万作・萬斎」と親と子で異なります。次は「皇學館大学」「國學院大學」「志學館大学」です。國學院は「ダイガク」を含めて固有名詞と考えているのでしょうか。一方皇學館、志學館は「ダイガク」部分は普通名詞と捉えているようです。最後、「吉野家ホールディングス」の看板の「ヨシ」はなぜか「土」に「口」です。デザイン上こうしたかとも思います。因みにこの字は「吉」の俗字とされるからでしょうか、私のワープロソフトには入っていません。この字体については私も苦い（というほどではありませんが）経験があります。数年前、出身大学に卒業証明書の発行を依頼しました。ところが「オマエの名前はない。土に口のヨシ見孝夫ならある」というのです。事情を説明して発行はしてもらいましたが、どうも落ち着きません。「ウチはドミンではない、サムライだ」と息巻く人もいるようです。

前号にも種々お教えをいただきました。感謝申しあげます。「表が小さくて読めない。ルーペを使った」という御指摘が複数届きました。私自身老眼なのに読み手の立場をすっかり忘れてしまいました。